慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「新中間層」論序説: 分化と分解の狭間に立つ変革期における新中間層
Sub Title	The new middle calss in the changing modern societies
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1976
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.10 (1976. 10) ,p.12- 51
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19761015-0012

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「新中間層」論序説

---分化と分解の狭間に立つ変革期における新中間層

川 合 隆 男

はじめに

一増加する新中間層

三消極論と積極論

四 新中間層の形成と動態、そして変革期における新中間層

一はじめに

われわれが検討しようとしている「新中間層」(der neue Mittelstand, the new middle class) は、これまでにも「中産階級」

(俸給生活者)」、「ホワイト・カラー」(white-collar)、「知識労働者」(intellectual workers)、「サラリアート」(salariat)等の諸範 (middle class)、「新中間階級」、そして時には「新しい支配階級」、「知識階級」、「職員層」、「サラリーマン(月給取階級)

希望、幻想を託され屈従、幻滅、不安、悲哀、侮蔑と疑惑に晒され続けてきた例は少ないのではなかろうか。 疇によつて多くの議論と論争、日常会話と運動闘争の中で言及されてきた。だが、近代社会においてこの言葉ほどに、その

史的社会的諸条件のもとで新たに形成されてきた社会層としての新中間層の分化と分解の過程における諸問題を理論的 定的に限定させることが多い。だが、 葉に示唆されるように、われわれは言葉のもつ象徴、社会的機能、固定的なイデオロギー等によつて自らの洞察と展望を固 討することによつて、「新中間層」論の混迷を多少とも整理して、それによつて近代および現代の労働生活の変化の一面を明 る現象を捉えきれないこともある。特にわれわれの労働、生活、 いかなければなるまい。いたずらに、一方的に希望と幻想、あるいは侮蔑と疑惑という残像のとりこになつて、 の中からわれわれの感覚と言葉、論理と運動を社会的に復権させることによつて閉塞されつつある状況を新たに切り開いて とはいえないかもしれない。多分に凝似的な、 中間層」という言葉に付与された意味内容は、確かにいまだに一つの統合された集合体、 われわれは託宣や魔術によつてではなく、自らの日常生活の歴史的歩み、 幻の階級的存在といわなければならないだろう。 規範等をあらためて再考察していく必要がある。 しばしば「新中間層」の言 集団、まして対自的「階級」 起りつつあ 偶然と選択 本論は歴 に検

あり、 に重視されてきた。」しかし、 本主義社会、そして社会主義社会の発展それ自体を理論的に 再吟味 するというよりも、(ドグマと化したマルクス主義と同様) 「……その場合の関心は、社会変動・発展という問題から意識的に離れ、没歴史的な『一般理論』を形作るという試みが特 現代社会学のすべてでは決してないが、一つの主要な傾向は、 A ・ギデンスがいみじくも指摘しているように現代は一九世紀的近代社会とは異なる状況にあるといわなければなら われわれの関心は比較考察を可能にし得る工夫のもとに 歴史的変化 にこそ向けられるべきで 社会変動・発展への関心が強められてきたといつても、 資

らかにしようと意図するものである。

、もし発達した資本主義国で変動が起るとすれば、それは革命によつてではなく、 国家の経済への介入度の増大、 ホワイト・カラー層の増加、部分的にではあるが旧財産階級にとつて代る 多様で不定形なエリ 内部からの変革の積み重ねによつてであろう)。

ない。

四

程で変化を示してきた。(2) ート層の出現という、社会内部に生じた新たな、根本にかかわる社会変動を否定することは不可能である。 過去三十年から四十年の間に顕著な変化を遂げたのと全く同じように、ロシアや、後続の社会主義革命を経験した国にも、 だが、西欧資本主義諸国

化する群像、そこにおける新たな自立と連帯の動きを見落してしまうことになる。また同じように、丸抱え的な日本型雇用 雇用賃金労働者階級として基本的に把握すべきことは妥当であるとしても、しばしば本質論を振りかざす余りに現実の多様 義とは異なる大勢の労働群像と人間生活群像を生み出してきているのである。確かにこの新中間層を資本主義社会における よつて、潜在化し流動化しつつあつた人々の自己実現欲求(しばしば状況的、調和的でもある)、上昇欲求と 社会移動 がいよい り、特に産業の高度化と高等教育の発達が新中間層化を一層促してきた。近代国家体制への中央動員化、急激な産業化等に %であつた。更に一九七○(昭和四五)年では二四・六%、販売従事者 を加えると実に三六・六% と 増加してい る の で あ の特殊性を強調するに終始するだけでも労働者生活の変化を適切に捉えることはできない。 よ刺激され、条件づけられることになり、今日にいたるわが国においても他の先進産業諸国と同様に、かつての前期資本主 つてみると、それは(専門的技術的職業、管理的職業、事務従事者)全体の一二・三%、これに販売従事者 を 加えると一九・九 近代日本における新中間層の形成も着実に促進され、一九二〇(大正九)年の国勢調査をもとに単純 に 就業職業構成によ

問 混迷等によつて、われわれは巨視的にはやはり一つの変革期に立たされているといわなければならないであろう。新たな労 条件下にあり如何なる可能な選択をしつつあるのか、ということは重要な関心であり課題である。これまで、社会学におけ 歴史への自らの参加と責任、成長・繁栄を経た後のより現実的な生活難と不安、汚職や不信感、政党活動や労働運動の 脱工業化社会、福祉への強い要求、労働・生活への再考察、自然と人間の復権、資源環境問題、「近代主義」への疑 人間生活群像としての新中間層が、 かつての一九二〇年代、 一九三〇年代におけると同じように、 今日如何なる

必要とする。此事情から私は社会学一般の考察に転じ去つた」と所懐しているところに成る程とうなずきつつも、最近にない。 手しようと思つたからである。併しながら、此研究は社会学上の他の何れの問題にも優りて私の不得手とする歴史的知識 熱情に燃えていた私の興味を強くひきつけたからであるが、又これは恩師米田博士の指導によりて先づ特殊問題の考察に着 る理論的分析枠組や方法論に主に関心を向けてきた筆者にとつて、歴史研究は極めて苦手とするところであることを素直に つてしきりに歴史研究の必要性を痛感している筆者は、社会学一般の考察から逆に歴史研究への志向を試みようと意図して かつて高田保馬が階級を中心とする研究を進めていて、「これは、階級と云う事柄 が 将来社会に対する

間層の形成と動態」 新中間層という関心領域に限定したかぎりで現代から過去への逆投影としての問題関心、すなわち「近代日本における新中 自ら認めつつも先に『社会的成層の研究―現代社会と不平等構造―』(世界書院、 第一段階としての作業は、検討されるべきいくつかの重要な余地を残し、いまだ暫定的な理論考察にとどまつていることを に逆投影することによつて、更に再び現代的課題を掘り起す一連の手法と作業を試みようとするものである。筆者にとつて 会成層の理論的考察、 かれるものであり、 従つて、ここでは、 筆者にとつての第二の作業ステップとしての「近代日本における新中間層の形成と動態」 以下、第二節、増加する新中間層、第三節、 について、 いわば「社会学的歴史研究」ともいうべき関心によつて、まず、現代社会における社会的不平等や社 次いで、 予め新中間層の形成と動態を把握するための分析枠を検討し明示してそれらを現代から過去 特にほぼ一九〇〇年代から一九三〇年代に至る社会学的歴史研究を進めることである。 消極論と積極論、第四節、新中間層の形成と動態、そして 一九七五年)をまとめたので、 の序章的部分として書

1 大塚先訳『資本主義と近代社会理論』(Anthony Giddens, Capitalism and Modern Social Theory, 1971)、 研究社、 変革期における新中間層、

の順で論を進めていくことにする。

一六

四年、二八四頁

- (2) 同書、二八三一二八四頁。
- (3) 黒田俊夫「人口の職業的移動」、有沢広巳・東畑精一・中山伊知郎編『経済主体性講座、第三巻、社会・Ⅰ』所収、中央公論社、 七四頁。 昭和三五年、
- 4 拙著『社会的成層の研究-現代社会と不平等構造-』、世界書院、一九七五年、二二一頁、
- (5) 高田保馬『階級考』、聚英閣、大正一二年、はしがき一頁。
- この研究の概略はすでに英文の形で発表している。Takao Kawai, "The Formation and Fluctuation of the New Middle Class in Mode-Japan, 1900-1930, "The Keio Journal of Politics, 1976 に掲載予定。

二 増加する新中間層

であるが、ここでは更に、多面的に規定しておきたい。(2) 働過程における特殊機能によつて、他の賃金労働者とは区別されている(特殊相異性)」という仮設的定義に示唆されたもの は、賃金労働者(社会的統一体)であり、構造的に条件づけられた「資本」との対立 中間層についての定義はS・ブラウンがその著『新中間層 ― その社会学的考察 ― 』の中で試みている「ホワイト・カラー 産賃金労働者層といつた他の社会層とは多少とも異なる生活様式、価値意識、階級意識を展開してきた場合が多い。この新 しかも多少の昇進のチャンスをもつ一群の人々をさしている。すなわち、より具体的には雇用されて管理運営、専門的技術 働者ということができるが、同時に社会的労働過程においては主に人間や象徴等を対象とする職務内容に従事する特殊機能 (「①労働監督的機能、②構成的または分析的機能、③管理的機能、④商業的機能」) をにない、 かつそれに 必要な技術 ・ 知識 能力 (専門的訓練や経験と相対的に高い学歴水準)と媒介的権限(一定範域・内容における委譲された権限)を活用して労働に従事する、 われわれが検討しようとする新中間層は、一般には、資本主義社会においては生産手段を所有しない限りでは雇用賃金労 事務、更に、販売に従事する人々のことである。また、これらの人々は、これまで旧中間層、かつての支配層、生 (本質的特徴)を本質とするが、社会的労

なら、 つた。こんにちでは(一九五○年代)五人に一人の割合、第三次産業の場合には三人に一人の割合になつている」と述べると(3) て、「マルクス(一八一八一一八八三年)が死んだ当時、労働力二〇人中一人くらいの割合で事務的職業と呼んでよい職業であ 産業社会において支配、 このように一応規定された新中間層についての質的な考察はしばらくおくとして、いまその数的・量的増加の側面をみる それは実に著しいものがある。 権力をめぐる階級闘争の特徴を強調しているR・ダーレンドルフが、 前期資本主義社会における所有を基軸とする階級闘争に対比して、後期資本主義社会、 「新中間階級の増大」 に触れ

まず何よりも新たな労働と機能を担う一群の人々の存在を単的に知ることができる。

的諸条件によつて特徴づけられるものであるかは明らかである。 土地と結びついた農民や農奴との間の中間媒介的地位を占めていたのであり、この「中間」 生成初期においては、 格の雑多で分類のしにくい、いまだ未分化、未分解で、しばしば勢力の弱い、しかも過渡的な分類として位置づけられるこ とになる。自営小工業・自営農業のような中小零細企業自営生産者、小売商人・手職人、 る媒介的な中間層もその歴史的社会的諸条件によつて制約される。従つて、その中間層の特に生成過程においては、 成層構造が、 歴史的には中間層の存在を古く溯ることも可能であろうが、世襲的、 「旧中間層」と呼ばれる)、そして官吏と民間職員からなる「職員層」(Angestellte, salaried man, white-collar)(先の「旧 に対して「新中間層」と呼ぶ) 近代社会の展開過程において階級 特に都市の商業的・工業的ブルジョアジー を一括して中間層という範疇に組み入れてきたのである。 (class) を基底とする成層構造に形成されていくことによつて、そこにお 従つて、 (有産階級)自体が一方では 特権的貴族 や 固定的な身分層(estate)によつて特徴づけられた われわれが、 いま考察の対象にしようとする「新 独立自営の専門職(これら三者はし 的性格が如何にその歴史的社会 そもそも近代資本主義経済の 領主、 他方では その性

しながら、 先のR ・ダーレ ンドルフの対比的な例証にみられたように、 特に一九世紀末から今世紀初頭にかけて以降 中間層」

という範疇もこうした歴史的制約を免れない。

八

中間層の数的な増加の側面を多少個別にアメリカ合衆国と日本の場合についてみておく。 中で新中間層論が繰り返されることになるわけであるが、これは次節以降でわれわれの視点から検討するので、ここでは新中で新中間層論が繰り返されることになるわけであるが、これは次節以降でわれわれの視点から検討するので、 くの問題におけると同様に、マルクスの思想が出発点であり、K・マルクス、G・シュモラー、 職員層 新中間層の出現は著しい傾向として注目されてくるのである。この中間層の移動化をめぐる論議は、やはり他の多 M・ウェーバー等の伝統 0

ホ ワイト・ カラーは、 静かに近代社会の舞台に現われてきた。 かれらのたどつてきた 歴史にはとくに 目立 つような 事件 はなか

ではかれらは二十世紀の舞台で新顔の俳優として主役を演じているのであるから、 会の色合いや感触をいちじるしく変えてしまつた。現代社会を特徴づけている心理的性格は、 を企業家と賃銀労働者とに二分して考えようとする、一九世紀的な社会観がくつがえされ、 ことは不可能である。 だが、このホワイト・カラーの世界を理解しないことには、二十世紀の性格をつかめない。 かれらをぬきにして、現代社会の動きを 分析する かれらの集団的行動様式は、 かれらに負うところが多く、ある 意味 かれらの数的比率が増したため、 アメリカ社

意味で新中間層の増加の動向をまず統計資料の活用によつてたどつてみたいが次のようなことに予め留意しておくことが大 も繋げて二十世紀の今日に至るホワイト・カラー層、新中間層の動向にも眼をすえて注目していかなければならない。その ことによつて一九五〇年代の大衆社会論の先鞕をつけその中で一躍脚光をあびることになつたが、われわれはミルズ以後に かつて「ホワイト・カラー」の出現に伴う大衆社会化状況を極めて的確に、そして多少とも冷やかな皮肉をこめて描写する ホワイト・カラー化がもつとも進み最初の中流階級社会と呼ばれるアメリカ合衆国の動きについて、C・W・ミルズが、

⑴(しばしば他の場合とも同様に)われわれのその概念規定にそのままびつたり適合する統計資料 は 得 にくい。従つて、統

切であろう。

計による新中間層の実態把握も一面的にならざるを得ないし操作的な把握にとどまりがちである。

の階層との対比において考えられた場合にのみ一つの全体としてとらえうるという想定、前提に立つている。(6) しまつた、多分に異質なもの(管理運営、専門・技術、事務、販売等)を集めたという性格をもつているともいえるわけで、 (ii) 先に 「中間層」 の歴史的社会的制約について触れたように、新中間層の統計は他の職業を分類しつくして最後に残つて

が多いという事実である。 値に言及する時に、 |||更に、 いまだ国際的に統一総合されてはいないのである。 各国の統計資料を活用して、例えば各国の「専門的・技術的職業」「販売職業従事者」等の 構成比、 同じ「統計的カテゴリー」(用語)が当然のことながら各国によつてその意味・内容・文脈が異なること 社会経済統計等になればなるほど、そうした制約が大きいし、近代統計事業の発達が一様でない あるいは数

はない。だが、一九二○年−一九六○年の期間と一九六○年−一九七○年の期間との二期に区分して対比してみると、 ばないし、 と同様にこの期間のホワイト・カラー層の増加率は著しく二六一・七%増であるが、サービス業の三五一・三%増にはおよ て、 販売職) 年)をみてみたい(表1-1、 れども、 ではブル も連続的に展開された。この期間の増加率は、 少くとも以上の諸点に注意しながら、まずアメリカ合衆国と日本の職業別就業者の変化(一九二○年、一九六○年、一九七○ ブルー・カラー層が六三・七%増にとどまり、農業は七二・六%減であつた。日本の場合はどうかというと、 の増加は、アメリカ合衆国では一九二〇年から一九七〇年に至る期間において他の層と較べてもつとも著しく、 最近の一〇年間では逆にホワイト・カラー層の方がサービス業やブルー・カラー層よりも高い増加率になつている。 ー・カラー層とホワイト・カラー層の増加率は、 ブル カラー層も二一七・一%増と高い。農業の減少率(二九・九%減) 表1-2を参照)。表の中における新中間層としてのホワイト・カラー層(専門技術・管理・事務 ホワイト・カラー層の二六○・九%増、 前期ではブルー・ カラー層の方がわずかに高い増加率を示したけ もアメリカの七二・六%減という程で サービス業の一九三・一%増に対し 日本

「新中間層」論序説 10 (11七六)

表 [-1 アメリカ合衆国の職業別就業者の変化----1920, 1960, 1970----(単位:千人)

17.9	58.0	86.3	11,946	24,475	36,421	78,627	66,631	42,206	計
- 42.1	- 52.6	- 72.6	- 2,269	- 5,995	- 8,264	3,126	5,395	11,390	Ⅴ農業⑷
16.3	152.0	193.1	1,363	5,036	6,399	9,712	8,349	3,313	Ⅲサービス業(3)
14.8	42.6	63.7	3,580	7,237	10,817	27,791	24,211	16,974	Ⅱブルーカラー層(2)
10.3	113.8	135.9	453	2,343	2,796	4,854	4,401	2,058	販売
40.2	189.0	305.1	3,931	6,398	10,329	13,714	9,783	3,385	事務
17.3	152.1	195.7	1,222	4,264	5,486	8,289	7,067	2,803	管理co
49.0	227.4	388.0	3,665	5,192	8,857	11,140	7;475	2,283	専門・技術
32.3	172.8	260.9	9,271	18,197	27,468	37,997	28,726	10,529	[ホワイト・カラー層
1960-1970 増減率	1920-1970 1920-1960 1960-1970 1920-1970 1920-1960 1960-1970 增減率 增減率 增減率	1920-1970 增減率	1960-1970 增減数	1920-1960 增 滅 数	1920-1970 增減数	1970	1960	1920	

⁽注)(1) 公務・所有を含む。

⁽²⁾ 技能工·職長, 生産工程従事者, 非農業単純労働従事者。

家事従事者, その他のサービス職業従事者。

⁾ 農業主,農業管理的職業従事者,農業单純労**働 · 農**業監督職業従事者

資料 1920 — Bureau of the Census, Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1957, Washington,D.C.,1960, p.74 Statistical Abstract of the U.S., for 1973, Grosset & Dunlap, Inc., p. 230) より作製。 1960, 1970— U.S.Bureau of Labour Statistics, Employment and Earnings, Dec., 1970. (1970年の引用は, The American Almanac: the

第1-2 日本の職業別就業者の変化――1920, 1960, 1970――

(単位:千人)

19.3	62.0	93.2	8,419	16,725	25,144	52,110	43,691	26,966	計(2)
- 29.8	- 0.2	- 29.9	-4,244	- 34	-4,278	10,008	14,252	14,286	Ⅳ農林・漁業
41.9	218.0	351.3	1,185	1,938	3,123	4,012	2,827	889	Ⅲサービス業(1)
32.9	129.8	205.3	4,106	7,051	11,157	16,591	12,485	5,434	技能工•生産工程
63.3	397.9	712.9	901	1,138	2,039	2,325	1,424	286	運輸・通信
- 62.2	27.3	- 51.9	— 229	79	— 150	139	368	289	採鉱・採石
33.5	137.6	217.1	4,778	8,268	13,046	19,055	14,277	6,009	Ⅱブルーカラー層
35.6	130.1	211.9	1,640	2,608	4,248	6,253	4,613	2,005	販売
59.8	151.2	301.3	2,723	2,742	5,465	7,279	4,556	1,814	事務
101.8	136.5	377.2	1,035	587	1,622	2,052	1,017	430	管理
60.4	112.2	240.3	1,290	1,130	2,420	3,427	2,137	1,007	専門・技術
54.3	134.5	261.7	6,688	7,067	13,755	19,011	12,323	5,256	【ホワイト・カラー層
1960-1970 增減率	1920-1970 1920-1960 1960-1970 增減率 增減率 增減率	1920-1970 增 滅 率	1920-1970 1920-1960 1960-1970 增減数增減数增減数增減数	1920-1960 增減数	1920-1970 增減数	1970	1960	1920	

(注)(1) 警察官,自衛官等の保安サービスも含む。

(2) 分類不能も含む。

資料 1920-黒田俊夫「人口の職業別移動」『経済主体性講座・3,社会(1)』中央公論社,昭和35年,pp.73-74。 1970—総理府統計局『昭和45年,国勢調査報告,第2巻』pp.372-382。 1960-総理府統計局『日本の人ロー昭和35年』,pp.442-447より作製。

表Ⅱ-1 アメリカ合衆国の職業別就業者構成----1900-1970----

 $% = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} \left(\frac{1}{2} \right) \right)$

8,445	70,182	6,927	58,850	29,030 37,291 42,206 48,686 51,742 58,999 66,681 44,485 22,196 78,627 48,960 29,667 58,850 6,927 70,182 70	48,960	78,627	22,196	44,485	66,681	58,999	51,742	48,686	42,206	37,291	29,030	総数(5)
100.0	100.0	100.0	100.0	37.7	62.3	100.0	33.3	66.7	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	뿌
3.9	4.0	12.1	7.4	0.7	3.3	4.0	1.5	6.6	8.1	11.8	17.4	21.2	27.0	30.9	37.5	Ⅳ農業 ⁽⁴⁾
26.0	10.7	31.7	9.9	8.2	4.2	12.4	8.1	4.4	12.5	10.5	11.7	9.8	7.8	9.6	9.0	Ⅲサービス業(3)
42.2	34.5	40.1	36.2	6.1	29.3	35.3	5.5	30.9	36.3	41.1	39.8	39.6	40.2	38.2	35.8	Ⅱブルーカラー層(2)
2.1	6.7	1.5	7.0	2.7	3.5	6.2	2.5	4.1	6.6	7.0	6.7	6.3	4.9	4.7	4.5	販売
13.2	18.0	7.3	15.7	13.0	4.4	17.4	9.9	4.7	14.7	12.3	9.6	8.9	8.0	5. 3	3.0	事務
3.5	11.4	2.6	11.7	1.7	8.9	10.5	1.6	8.9	10.6	8.7	7.3	7.4	6.6	6.6	5.8	管理 ⁽¹⁾
9.1	14.8	4.8	12.1	5.5	8.7	14.2	4.1	7.2	11.2	8.6	7.5	6.8	5.4	4.7	4.3	専門・技術
27.9	50.8	16.1	46.6	22.8	25.5	48.3	18.2	24.9	43.1	36.6	31.1	29.4	24.9	21.4	17.6	[ホワイト・カラー層
黒人 有色	入申	黒人 有色	人自	女	男	小計	カ	男	小計	1950	1940	1930	19Z0	DIET	Land	
70	1970	1960	19		1970			1960		1050	1	1000	1000	1010	1000	

(注)(1) 公務・所有を含む。

(2) 技能工・職長, 生産工程従事者, 非農業単純労働従事者。

家事サービス従事者, その他のサービス職業従事者。

農業主,農業管理的職業從事者,農業單純労働・農業監督職業従事者。

(5) 単位千人。

資料 1900-1950: Bureau of the Census. Historical Statistics of the United States, Colonial Times to 1957, Washington, D.C., 1960, p. 74. the Statistical Abstract of the U. S., for 1973, Grosset & Dunlap, Inc., p. 230, p.231) 1960~1970: U. S. Bureau of Labar Statistics,Employment and Earnings, Dec., 1970, (1960~1970 年の引用文献は, the American Almanac;

20,390	31,719	52,110	17,081	26,609	43,691	39,261	35,626	33,329	29,341	26,966	総数(2)
39.1	60.9	100.0	39.1	60.9	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	빡
10.2	9.0	19.2	16.9	15.8	32.6	40.4	47.8	53.5	49.0	54.0	V 農林・漁業
4.4	3.3	7.7	3.8	2.6	6.5	6.1	4.1	3.5	3.9	3.4	Ⅱサービス業⑴
9.5	22.4	31.8	7.8	20.8	28.6	24.1	22.3	21.7	21.3	20.6	技能工·生産工程
0.4	4.0	4.5	0.4	2.8	3.3	2.2	1.3	1.2	1.1	1.1	運輸・通信
0.0	0.3	0.3	0.1	0.8	0.8	0.9	1.2	1.4	0.7	1.1	採鉱・採石
9.9	26.7	36.6	8.3	24.4	32.7	27.2	24.8	24.3	23.1	22.8	Ⅱブルー・カラー層
, or	6.9	12.0	4.4	6.2	10.6	10.6	8.4	5.2	10.4	7.6	販売
7.0	7.0	14.0	3.8	6.6	10.4	8.7	8.6	7.6	7.5	6.9	事務
0.2	3.7	3.9	0.1	2.2	2.3	2.1	1.9	1.7	1.8	1.6	管理
2.4	4.2	6.6	1.7	3.2	4.9	4.9	4.5	4.2	4.3	3.8	専門・技術
14.7	21.8	36.5	10.0	18.2	28.2	26.3	23.4	18.7	24.0	19.9	[ホワイト・カラー層
×	男	수 라	*	男	少計)(昭和25)(昭和30)	(昭和25)	(昭和22)	(昭和5)	(大正9)	/
55)	70 (昭和45)	1970	5)	1960 (昭和35)	19(1955	1950	1947	1930	1920	

(注)(1) 警察官,自衛官等の保安サービスも含む。

(2) 単位千人,分類不能を含む。

資料 国勢調査

「新中間層」論序説

号|用 1900-1955:黒田俊夫「人口の職業別移動」『経済主体性講座・3. 社会(n』中央公論社, 昭和35年, pp.73-74, より引用作製。

1960:総理府統計局,『日本の人口一昭和35年一』。1970:同,『昭和45年,国勢調査報告,第2巻』。

三千八百万人となり、 ラー層の方が多かつたことがわかる。 一九七〇年時点でアメリカでは約二千八百万人のブルー・カラー層に対して、 日本はブルー・カラー層とホワイト ・カラー層とが共に約一千九百万人であるがわずかにブル ホワイト・カラー層に分類されるものは、 1. 約 カ

相違、 管理職、 逆に管理職、 ○年の期間には、 る事実も無視し得ないし、 確立しておらず自立的な立場から社会的に機能していきにくいという面があり、 たつて一貫して連続的に高くプロフェッショナリゼーションの傾向の著しかつたことを知ることができるし、 増加率が高く、次いで専門的・技術的職業従事者、 に専門的 ホ ワイト・カラー 及びそれらを支える基本的価値観の違いをも多分に反映しているものといわなければならない。 販売職従事者の順の増加傾向も両期間にわたつて連続している。日本においてはいまだ専門・技術職の地位も充分 ・技術的職業従事者と事務職業従事者の増加が著しい。 そして僅かに専門・技術職の順で高かつた。それに対比して、アメリカでは専門・技術職の増加率が 日本では事務職、 層内の個別な変化に注意するなら、アメリカではホワイト・カラー層の中でもこの五〇年間にお 職業教育制度や高等教育のあり方、産業化や近代国家の歴史的展開のあり方、 次に管理職の増加率が相対して高いが、一九六〇年から一九七〇年にかけての期間 販売職従事者の順の増加率を示していた。 日本の場合には、 プロフェッ 特に管理的職業従事者と事務職従事者の ショナリゼーションが遅れてい しかし、一九二〇年―一九六 行政や企業活動 他の事 両期間 **予務職、** いて特 にわ にには

げようとしている。あるいは固定した役柄にとらわれずに時には台本すらも書き変えてさまざまな役柄を体得しつつ見せ物 舞台を下り始めたといえるかもしれない。 あてがわれた台本を懸命に覚えようとしているところに止らずに、 |業別就業者の統計的な変化をみても、二〇世紀に入つてホワイト・カラー層が、形容すれば、新顔として舞台に登場し 表Ⅱ--1、 表Ⅱ-2のアメリカと日本の職業別就業者構成比変化をみることによ 覚えた台本を更に自らのイメージで役柄をつくりあ

つて、そのことの一面をとらえることができる。

度の割合で並び、一九七〇年にはいよいよブルー・カラー層三六・六%、ホワイト・カラー層三六・五%となり、 三%)、サービス業三・四%であつたが、一九六〇年にはブルー・カラー層三二・七%、農林・漁業三二・六%とほぼ同程 漁業五四・○%、ブルー・カラー層二二・八%、ホワイト・カラー層一九・九%(もしこの中から販売職従事者を除けば一二・ 更に一九五○年から一九六○年に至る過程でブルー・カラー層とホワイト・カラー層とが逆転してその一九六○年にホワイ が高くなつてきているところからも確実に推測し得る。 の増加数及び増加率では技能工・生産工程従事者(三二・九%の増加率)よりもホワイト・カラー層(五四・三%の増加率)の方 カラー層の占める割合がより一層著しくなろうとしている。そのことは、先の表1-2でも明らかなようにここ最近一〇年 カラー層一七・六%、サービス業九・○%であつたが、すでに一九一○年に至る過程で農業とブルー・カラー層が逆転し、 ・カラー層は四三・一%、一九七〇年には四八・三%を占めているのである。ところで、日本では、一九二〇年に農林 アメリカの場合、一九〇〇年に就業者総数に占める各構成比は農業三七・五%、ブルー・カラー層三五・八%、ホワイト・ ホワイト・

七%、自営一九%、一九六〇年にブルー・カラー五一%、ホワイト・カラー三五%、 自営一四% であつた。更に、『揺れる %、一九三三年に一七・一%、一九五〇年(ドイッ連邦共和国)には二〇・〇%であつた。スエーデンでは、一九二〇年に、ブ 九%、一九五一年三一・九%と確実に増加しているけれども、イギリスではブルー・カラー層の占める割合が連続して非常(?) よつて事情が異なる。例えば、イギリスではその割合は一九一一年二三・二%、一九二一年二四・三%、一九三一年二五 中産階級―現代イタリアの階級分析―』を書いて、分類基準を俸給において高級管理職や独立専門職、 ルー・カラー七〇%、ホワイト・カラー一一%、自営一九%、一九五〇年に、ブルー・カラー五四%、ホワイト・カラー二 に高く、アメリカ合衆国のような 急激な転換 はみられない。ドイツでは、一八八二年 に二・五 %、一九〇七年に一一・二 他の国々についてみても、この新中間層、ホワイト・カラー層の増加傾向は否定し得ない事実である。もちろん、各国に 旧中間層を除いてホ

層の存在は単に過渡的な範疇として位置づけるだけでは処理し得ぬものになつてきているのである。 は一九七〇年一一・一%、チリでは一九七一年二一・七%、アルゼンチンでは二八・四%等と、いずれもホワイト 割合ながら増加傾向を示しており、フランスでは一八八六年七・二%から一九六八年の二六・六%へ、ソ連においても一九(5) ワイト・ 一三年二・四%、一九二四年四・四%、一九五九年一八・八%、一九七二年二〇・九%と増加している。また、スペインで(コ) 一年二・七%、一九二一年二・七%、一九五一年九・八%、一九六一年一三・一%、一九七一年一七・一%とやはり、低い (ホワイト・カラー小ブルショアジーである公務員、教師、民間サラリーマン等) は、 イタリアでは、 一八八一年二・一%、一九○ カラー層を推計しているP・シロスーラビーニの統計資料を参照するなら、 新中間層・ホワイト・カラー層 ・カラー 0 割合

ځ ° を確実に増加させてきたといえる。しかし、一般的傾向がそうであるとしても次の諸問題を提起しておくことが必要であろ 増加要因として働きかけ、先に見てきたような専門的・技術的職業従事者、管理的職業従事者、事務職従事者、 傾向の成長、生産と分配機構の複合性の増大、計画・規制・統制といつた仕事の増加による管理機構の必要性、 にもかかわらず、産業社会の展開過程での構造変化によつて強められてきたと考えられる。すなわち、 以上の検討によつて、新中間層の増加傾向は明らかである。この基本的傾向は資本主義と社会主義のいずれの形態の違い 及び専門的サービスの増殖、移転支出の増加、行政機能と公的サービス機能の成長、更に中等・高等教育の発達等が 産業の技術的科学的 財と余暇

つて、その点で雇用労働としての新中間層を推計するなら、例えば日本については、自営層を除いて一九五〇年一五・四% 自営層としての旧中間層や高級管理職従事者も含めて一括された統計的分類 になつている (表1) 「増加する新中間層」という時に、多分に社会的労働過程としての機能的側面に焦点をあてての指摘に傾

(表■−2では二三・四%)、一九六〇年二〇・八%(二八・二%)、一九七〇年二八・九%(三六・五%)となつており、やはり両

者に八%前後の差がある。(3) の名称、 ていた)、大正―昭和初期では「サラリーマン」「俸給生活者」「勤め人」「腰弁」、「洋服細民」「新中間階級」「知識階級」等 銀行員が加わる。そして、 である。 ければならない。しかし、日本において、いまや雇用労働としての新中間層は就業者の約三分の一を占めるに至つているの て明らかに減少しているとしても他は増加し再生産されているのであり、自営層と新中間層との質的差異は確認しておかな 第二次大戦後には、これらに加えて、「ホワイト・カラー」の名称が用いられるようになつた。 明治時代には「給料取り」「月給取り」の名称 明治二〇年代には二葉亭四迷の『浮雲』、『平凡等』によつて、「給料取り」の悲哀が近代日本小説の中で扱われ 雇用化がどの職業領域においても一層進んできているとはいえ、自営層は特に農林・漁業にお (明治前半は官員、吏員、教員、巡査等。明治後半には、これらに会社員、

の増加率が著しいという特徴を展開しつつある。日本の場合、 傾向の初期乃至前半期においては、相対して事務職と販売従事者の増加傾向が高いが、最近では専門的・技術的職業従事者 ておいてよいだろう。その上で新中間層の増加傾向を分析すると、表1—1、表1—2で示されているようにその増加拡大 等教育の新規卒業者のこの領域への進出などからしても販売活動自体が変つてきており、これをホワイト・カラー 者をここに入れるべきか否かは、 りも管理的職業従事者の増加率が高かつたのは注目しておいてよい 新中間層 の増加傾向の内部をもう少し検討するならば、 慎重であるべきであろう。しかし、産業構造と産業組織の変化、大量消費、 最近の動向においては専門的・技術的職業従事者の増加率よ いくつかの注目すべき傾向が見出せる。 (表1-2)。 確 後期中等・高 かに販売従事 層に入れ

女性二二・八%であり、 カラー層二四・九%、 とは女性の就労化がこの領域で著しく展開してきたことを示している。例えば、 (のホワイト・カラー層に占める男女別構成をみると、構成比の男女差が次第に縮小しつつあるということであり、このこ うち男性一七・○%、女性七・九%であつたが、一九七○年では四八・三%のうち男性二五・五%、 日本の場合には一九二〇年にホワイト・カラー層一九・九%、うち男性一四・〇%、女性五・二%、 アメリカ合衆国で一九二〇年にホ ワイト・

三七

「新中間層」論序説

成をみると(表Ⅱ−1)、白人と黒人及び他の有色人種は歴然としており複雑であることを見落してはならないであろう。 い。また、アメリカ合衆国については、一九七〇年にホワイト・カラー層が全体で四八・三%であるけれども、その人種別構 ー層における構成比の男女差の縮小は、ブルー・カラー層のそれと比較するとき、女性 の就労化がホワイト・カラー層 一九七○年には三六・五%のうち、男性二一・八%、女性一四・七%であつた(表Ⅱ—1、表Ⅱ—2参照)。このホワイト・カラ リカでは特に事務職と専門・技術職、日本では特に事務職と販売職)とサービス業の領域で進んできたということに他ならな

摩擦と軋轢、不安と緊張、運動と計画、漂流、孤独、絶望と情熱等が混沌とする人間社会の大きな渦としての移行期、 況や知識社会化状況が指摘される背景がここにもあるわけで、固定的な資本主義論や社会主義論、古い産業社会論の枠中で をどのように活用し再編していくかという過程のもとで新しい資本主義や社会主義、そして民主主義のあり方が問われる。 く走り廻りがちであるが、農業社会―産業社会―福祉社会という大きな図式の中で資源・技術・組織・生活・情熱・知性等 はこうした動向はもはや捉えきれないと考えるべきであろう。「福祉社会」も多少とも繁雑に議論されると言葉だけがせわし れまでの「中間的・過渡的」性格という歴史的社会的制約を新しい状況の中で打ち破ろうとしているのである。脱工業化状 いるといえる。にも拘らず、これまで増加し続けてきた新中間層の存在は無視し得ない程に拡大してきているのである。こ (d)われわれが「増加する新中間層」を指摘するときに、これまで挙げた(a)、(b)、(c)の諸点はいずれも重要な問題を含んで

(1) Fritz Croner, Soziologie der Angestellten, Kiepenheuer & Witsch, Koln · Berlin, 1962, s. 112-113

期の一断面としてこれまでみてきたような動向を捉えることはできないであろうか。

- (2) S・ブラウン著(鈴木幸寿・田中義章訳)『新中間層』、誠信書房、昭和四三年、一五五―一五六頁。
- (3) R・ダーレンドルフ著(富永健一訳)『産業 社会における 階級 および 階級闘争』、ダイヤモンド社、昭和三九年、七一頁、F. Croner, a. a. O., S. 197-198, Günter Hartfiel, "Germany," in White-Collar Trade Unions, ed. by A. Sturmthal, Univ. of Illinois Press, 1966, pp. 129-130 S・ブラウン、前掲書、長尾周也『現代の階級理論』、ミネルヴァ書房、 昭和四二年
- C・W・ミルズ著(杉政孝訳)、『ホワイト・カラー』、創元新社、昭和三二年、序文一頁。

- (6) C・W・ミルズ、同書、三三七百
- 7 James Littlejohn, Social Stratification, London, George Allen & Unwin Ltd., 1972, p. 93
- (∞) G. Hartfiel, op. cit., pp. 129-130
- (φ) A. H. Nilstein, "White-Collar Unionism in Sweden,"in White-Collar Trade Unions, ed., by A. Sturmthal, Univ. of Illinois Press, 1966. p. 267
- (10) P・シロスーラビーニ著(尾上久雄訳)、『揺れる中産階級』、 日経新書、一五八頁。 この統計は自営の専門・技術職、 た俸給者の割合であるから、 これまでみてきた表Ⅰ・Ⅱのアメリカ合衆国と日本の場合とは直接に比較できない。 管理職、 事務職、
- (1) 同書、一六四頁。(1) 同書、一六四—五頁。
- (1) 同書 ープロ
- とになされている。 Bendix and S. M. Lipset, The Free Press of Glencoe, Inc., 1953, pp. 371-380,また、先のP・シロスーラビーニの 推計はこうした考 慮のも 拙著『社会的成層の研究』、世界書院、一九七五年、二四五頁、Lewis Corey, "The Middle Class,"in Class, Status and Power, ed. by R.
- 14 Anthony Giddens, The Class Structure of the Advanced Societies, London, Hutchinson Univ. Library, 1973, p. 179

三 消極論と積極論

化 者と専門・技術職、 (団産業社会から福祉社会への移行期・変革期における「新中間層」という歴史的性格、の諸特徴について触れた。 管理職との間にみられた時期的な増加傾向の差異、 (c)ホワイト・カラー労働部門への女性の著しい就労

われわれは前節で増加する新中間層という基本的傾向を指摘し、更に側旧中間層と新中間層の問題、

(b)事務職、

gestellten, 1964) を挙げることができるが、ブラウンはホワイト・カラーの社会学的分析の伝統を、 面にすえて理論的に考察を試みたものとしては今日までのところS・ブラウンの『職員の社会学』(Zur Soziologie der An-

次に、この基本的傾向について従来どのように評価し議論してきたのかをみておくことが必要である。「新中間層論」を正

(i) マルクス主義的立場(「これは産業資本主義における生産関係から出発している。この立場は、 ホワイト・カラーをある 「特殊

な種類の賃金労働者」と見るのであつて、それと産業労働者との 違いは「ただ外面的なこと」にすぎない。マルクス主義的伝統から 労働者もホワイト・カラーも、とりわけ資本の労働に対する支配という観点からみられる」。)

素姓、いろいろの関心によつて、かの資本主義によつて圧迫され、産業に依存するに至つた旧中間層の代替物、つまりその 後継者と みなされ、またダイナミックな経済および社会の内部において、それを安定し、媒介する機能を発揮するようになる」。) (ii) 保守的リベラルな立場(「これはホワイト・カラーを『新中間層』の中心的構成部分と見る。この新中間層は、仕事、

ち 行動規範と評価を発展させる」。 ∭ 官僚制的グループとしてのホワイト・カラー (「ホワイト・カラー階級は、官僚と似たような構成の 経営体のな かで、 権限の持続的な「委任」によつて特徴を与えられた管理ヒエラルヒーにおいて仕事をしており、それによつて 官吏と似たような

ワイト・カラーの動向を固定観念にとらわれずに適切にしかも新たに積極的に捉えているものといえる。ここでは、ホワイ ・カラーを差異づけるという一つの仮設的考察を展開した。彼のこの理論的な考察はマルクス主義の立場に立ちながらホ という三つの基本的立場を区別して、特に⑴の立場からマルクスの理論の意味に即して拡大解釈しつつ、労働者とホワイ 新中間層をめぐる評価について、大きく回消極論と的積極論という立場にわけて検討していく。

・カラー、

においては消極的役割しか果し得ないのであり、帰するところ「プロレタリアート独裁」「プロレタリアート 執権」によつ て窮乏化過程で労働階級運動に必然的に連ならざるを得ないし、期待するに至るとしても、 る。 場は、資本主義の発展の中で(旧・新)中間層の「没落」と階級構成の両極分解を強調 するマルクス 主義によつて代表され に組み入れられるべきであると基本的に考える。しかし、ホワイト・カラー層は「賃金労働者」としておかれた状況からし (a)消極論 新中間層の商品化による雇用労働力としての性格が強調され、そのことによつて一つの社会的統一としての労働者階級 ここでは、(i) 資本主義社会における労働力の商品化、(ii) 中間的性格の無力と曖昧さが強調される。この立 所詮彼等は労働運動・社会運動

てしか革命は達成されない、とする。西欧共産党や社会民主党等の最近の「白化」、最近 の 日本共産党の「プロレタリアー

大解釈による理論考察を反映してきているものと思われるが、基本的には先にみたような主張が教条的に一貫して展開され ト執権」の綱領からの削除の動きは、先進資本主義社会での現状把握、民族路線やS・ブラウンのようなマルクス主義の拡

記、会計、商業通信など商業的諸操作に従事する商業的賃金労働者及び監督労働にすでに言及していたことは注目される。 用が必要になる」。そして、本来的商業労働者は、賃金労働者中の高給部類、平均労働以上の熟練労働 をおこなう 賃金労働 価格計算、簿記、会計、通信などは、すべてこれに属する」。「かようにして、本来的事務所を形成する商業的賃労働者の充 をしたりするために、産業資本の流通のためにたえず行わなければならぬ商業的諸操作―も増加することは明らかである。 銀は下落する。 向がある」。何故なら、一つには、事務所内での分業、 者部類に属する。「ところがその賃銀は、資本制的生産様式の進展につれて、平均労働との 比率 においてさえも低落する傾 商品資本の姿態で現存する生産物を売つたり、その売上金たる貨幣をふたたび生産手段に転形したり、 較べれば、つねに取るにたりぬ小さなものである。それはともあれ、生産規模が拡大されるのに比例して、 る資本と賃労働の二大階級という資本制的生産様式の基本的特徴を踏まえて近代資本主義社会を把握していた。そして、簿 がつて労働は総じて賃労働として登場)、労働疎外、生産の直接的目的および規定的動機としての剰余価値 てきた。ここでは、 よる商業や国語の知識などの一般的・安価な再生産とそれによる競争の 激化 によるものである。「だから、 「作業場と区別される事務所としては、商業資本はたえず流通過程で機能する」。「もともとこの事務所は、 (a)—(i)分解説 資本制的生産が進むにつれて、これらの人々の労働力の価値が減少する。彼等の労働能力は増加するのに、 より多くの価値および利潤が実現できる場合には、資本はこうした労働者の数を増加させる」のである。 マルクスは、 マルクス主義からの分解説と非マルクス主義からの大衆社会説とをとりあげる。 諸生産物の商品化(そこでは労働者そのものもただ商品販売者、自由な賃労働者として登場し、した 第二には資本制生産様式に即応した科学や国民教育の普及 全体についての計算 の生産、 僅かの例外はあ 商業的諸操作 産業的作業場に そこにおけ 彼等の賃 進歩に Ī

た、「資本制的生産そのものは、指揮労働という労働を資本所有から全く分離して 街頭 をさまように至らしめた」として、 指揮労働としての産業管理人が、資本から引離された機能者として、労働過程一般の単純な担当者として、労働

者として、しかも賃労働者として、まず現象する、という変化を的確に把握していた。

進等の諸点は軽視されていたといえるだろう。 と対立が強調されることによつて、そこでは近代技術や科学知識自体の発達、社会的労働過程や官僚制化、 のものではないので、商業的労働者も分解にさらされ窮乏化をまぬがれないのである。従つて、資本と賃労働との間の分解 資本的生産様式における労働力、商品化、諸収入および収入諸源泉の同一性によつて、それらの同一範疇の側面が強調され マルクスのこうした歴史的な深い洞察によつて生産的労働者と商業的労働者とがすでに捉えられていたが、帰するところ 基本的に生産は資本のためのものにすぎず、生産手段が生産者たちの社会のために生活過程をたえず拡大してゆくため 商業的労働者の数的な増加も産業資本の利潤追求のための一時的、 一般的福祉の増 過渡的存

本質論を繰り返すのみで、方法論的にも問題があり、前節でみたような諸傾向を適切に説明できないできたといえる。 客観的には商業的労働者・ホワイト・カラーは賃金労働者であるにもかかわらず、主観的・心理的には「誤つた」意識、虚 そして、その後のマルクス主義の展開において、この基本的認識はマルクス理論をいわば固定的・教条的に受けついで、 即自的階級状態から脱し得ないでいる過渡的階級として位置づけられてきたといえるだろう。結果として、

在形態として捉えられていた。

erer)、T・ガイガー ルクス主義の伝統のうちにある新中間論として、R・ヒルファーデイング(Rudolf Hilferding)、E・レーデラー(Led-(Theodor Geiger) 初期のF・クローナー 日本においては、

れわれが特に「近代日本における新中間層の形成と動態」を考察していくうえで、この分解説として大正期における山川均 「中産階級滅亡論」や「人も知つている通り、数年前までのマルクス主義思想の全盛期に於いて行われたインテリゲンチャ(8) (Croner) 等を挙げることができよう。

論は問題の提出方法を誤つていないか!」「インテリゲンチャ論と技術論」等を検討していく予定で いる。(3) ることをインテリは如何に自覚すべきであるかという消極的観点から取り上げられた」と批判する昭和期の戸坂潤 論は大体から云つて資本主義社会に於ける階級「対立」に処して、インテリが如何に無力であるか、或いは自分が無力であ ずに、終つたといえる。 リ意識とインテリ階級説―所謂「知識階級論」に対して―」「インテリゲンチャ論に対する疑問―現代のインテリゲン チャ 「俸給生活者問題」、 「新中間階級論」等は、多分にイデオロギー的性格と政策論的課題を色濃くも ち、 戦前の「知識階 充分深められ 「インテ

らの消極論が生産関係、 等は大衆社会的状況においてただ右往左往するだけで、ホワイト・カラーの客観的プロレタリアート化や主観的プロレ でマルクス主義と異なる立場から説いたC・W・ミルズの研究を挙げることができるだろう。先のマルクス主義の分解説 アート化が進んでも労働運動や社会運動でも結局消極的役割にとどまつていることを、繁栄しつつあるアメリカ合衆国の中 (a)—(ii)大衆社会説 ホワイト・カラーの世界を理解しないことにはもはや二〇世紀の性格をつかめないとしながらも、彼 交換関係からの直接的説明であつたのに対して、ミルズは大衆社会状況における社会心理的側面 タリ カ

らの消極論であつたといえる。

与え、 苦しめた物質的苦難と心理的には同じ苦難が二〇世紀のホワイト・カラーを襲うに至つた。ホワイト・カラー 自己の主張を表明したりすることができない、みじめな存在である」。「ホワイト・カラーは、 も一番損な役廻りを引きらける。彼は犠牲の英雄であり、他人に踏みつけられ、影響されることはあつても、 や「象徴」を対象とする多数の管理職、専門職、 ルズによると製造工業における機械化、 踏みつけることはなく、他人の事務所や店でめだたずに働き、大きな声でものを言つたり、口答えしたり、積極的に 分配事業の拡大、調整業務の規模の拡大、という根本的な原因によつて「人間」 知職階級、販売職、事務職を増加させてきたが、一九世紀に賃銀労働者を 職場で、その時間と労働だけ は、「……いつ 他人に影響を

三四

は、社会組織の単なる一部分として、誰とでも簡単に交換しうる存在となつてしまう」。 発性は最小限に抑圧される。こうして官僚主義機構が、個人の自由と合理性を徹底的に奪い去る結果、 ている。そして、腹がたつたり、癪にさわることがあつても、それをすばやく抑制しなければならぬ」。しかも、「ホワイト・ でなく、自己のパースナリティをも切り売りしている。彼は、給料と引き替えに、その微笑と、親切そうな身ぶりとを売つ カラーの職場では、ただ能率本位の観点から、各人の仕事の内容や手順を規定するから、それは無味乾燥なものとなり、自 ホワイ カラ

だろう」。 集団としては政治的に無能なのである」、後衛でしかないのである。「かれらは、集団としての公認の地位をもたないから、(メ゙) 威のあるものの後について行くだろう。そして、権威の基礎は権力にあるから、かれらは結局権力者に従属することになる なり、その意見は混乱し動揺し、その行動は散漫で永続きがしない」。「当面の問題としては、かれらはなんでもよいから権 個人的私的な地位によつて進路を決定しようとするが、そこには確固たる目標と意欲がないから、かれらの存在は浮動的と 明瞭な希望も、 腹の底からの反抗もないホワイト・カラーは、不安と沈滞の中で、「個人としては道徳的に無防禦であり、

いだろう。しかし、 心理を鋭く描き出し、 されている。高度に統合された産業国家の中での二〇世紀の新顔が無力な大衆と化し苦悩に沈むホワイト・カラーの内面 状況のもとでパワー・エリートに牛耳られ、不安と沈滞に打ちひしがれた、余りに黙々とした無力な存在として浮き彫りに あるが、かつてのアメリカの典型としての開拓者的性格に対して現代の典型としてのホワイト・カラーの生活は、大衆社会 このようにして、ミルズは、旧中流階級と新中流階級(ホヮイト・ヵラー)、後者の生活様式と力等を 分析 しているわけで ホワイトの『組織のなかの人間』にしろ、この分析は、一九五〇年代のホワイト・カラーを典型とするアメ ホワイト・カラーの人間的、 政治的重要性と責任を説こうとしたことは注目しておかなければならな

リカ合衆国の歴史的社会的制約という点を見落してはならないし、大衆社会の社会心理的側面とホワイト・カラーの不安と

制約を見落して、 大衆的政党、 無力を余りに強調しすぎているといえる。戦後日本の大衆社会論、ホワイト・カラー論、政党・政治路線 中産階級政党、プロレタリアート独裁・執権等) しかも理論的方法的な検討も充分なされないままに、 の議論にしろ、 時流潮流として繰り広げられるままに終つたのでは 論壇をにぎわせたけれども、 そうした歴史的社会的 (国民政党、 階級的

なかつたろうか。

ある、 は、 官僚制的傾向、 るということを考える」 なかには、 力に疑いをもつならば、 内部的な闘争がくりひろげられている、ということを知つた。もし、中間層が分裂しているからという理由で、 に「われわれは、いま、 ーデンの労働組合等の例を挙げ乍ら、中間層の集団がまつたく受動的な惰性の力しかもつていないとする意見に反対し、更 主義、イギリスのギルド社会主義、その中間層の協同組合的な自己救済活動、 もまた正しいものではない」として、強引なまでに積極的な評価を示していた。イタリアのファシズム、ドイツの国家社会 する利害関係をもつ無数のさまざまの集団から成るものだから、という懐疑的な考え方をいだいている、 をきたすこと、まさに自明である」。 また、「……中間層の問題に対して、 中間層はといえば、 しばしば、 (b) 積極論 古い中間層と新しい中間層という、「……中間層というものがやがて消滅するという議論はすべて、たちどころに、混迷 と捉えるものである。一九四九年にいち早く『現代の社会学』を書いたドイツの 社会学者ケーニッ 長い経験によつて公共の仕事の取扱いの点で自由に意のままにできる非常に強力な一連の集団が、 ここでの主張は、ホワイト・カラー層、新中間層の出現と増加について()機能的側面、(i)権限委譲、(i)合理的 に経歴と社会移動の可能性等によつて、その固有性と役割を積極的に認め、近代社会での不可避的な過程で まさにそれと同じ理由から、労働者階級についても、疑わざるを得ないであろう。 労働者層もまた決して統一的な階級を形成しないし、また、 ケーニッヒの主張に、 この積極論の立場が如実に示されている。 アメリカのニュー・デイール政策運動、 「無階級」社会の枠内にあつてさえ、 かのすべての意見 ы (René Konig) しかも中間層の たがいに相対立 つねに存在す その組織能 スエ

と完成は、その批判とともにはじまるのでなければならない」。(%) る。「今日ではすべてをマルクスとエンゲルスから 証明 できる、ということになつている」。「……マルクス主義理論の発展(5) 経営が存続していること、近代経済の適応能力の存在、中間階級消滅説の誤りを確信するにいたらしめたこと、を述べてい きるかぎりの高度の一般的福祉の達成こそが最終目標であること)、大経営が数と規模の 両面 で 増大しつつあるのとならんで中小 関しても職業活動にしても高度に段階化され、分化されてきたこと、一般的富裕、一般的福祉の増加普及の事実(そして、で 九二〇年代において窮乏化による両極分解説・崩壊説や教条化するマルクス主義を鋭く批判してすでに理論化しようとして う。もつとも、ベルンシュタインは新中間層、ホワイト・カラー層自体を直接分析してはいないが、彼が一九世紀末から一 ける 「経営」 「事務所」〉を挙げることができるし、社会主義運動におけるE・ベルンシュタ イン の主張 を 指摘で きる だろ 僚制と官僚層(⑴職務への義務、⑵階統制、⑶権限、⑷自由な任用、⑸専門の資格、⑹貨幣による給与、⑺兼任の制限、 いたことは注目しておかなければならないだろう。近代社会の発展は、社会構成が単純化したどころか、むしろ、所得額に しかし、この立場は古典的にはM・ウェーバーの、やや冷酷なまでの近代の合理的支配における純粋型、 - ⑿職務規律によつて特徴づけられる)の分析(『支配の社会学』)(公法的支配における「官庁」「役所」、私経済的支配に お(3) 技術としての官 (8)昇進、(9)行政

そこから生じる経済的、政治的、および倫理的要求とによつて 規定 されているのであり、労働者階級 が 実現 しなければならないの ……労働者階級の偉大な解放闘争の歴史的権利と目標は、できあいの公式に執着するものではなく、この階級の歴史的存在条件と、 理想なのであつて、教条ではない、というのがそれである。

あらゆる新しい認識のことである。 義者であつたこと、彼らが社会主義史上で最大の修正主義者であつたことを忘れてはならない。修正主義とは、あらゆる新しい真理 この見解を≪修正主義≫と呼びたいのなら、そうするがよい。だが、それならば、マルクスとエンゲルスも彼らの時代には修正主

われわれは、 この積極論の立場をより具体的に展開してきたものとして、エリート (選良)説と中堅説 ・ 安定勢力説とを

科学技術の新たな担い手として 登場 してきたものであるとする。その一つの試みとしてJ・バーナム(James Burnham) 者」とは、生産過程の技術的方向づけと総合調整を担う人々、生産過程を指導、管理、経営、組織する機能を遂行する人々 支配することによつて、間接的に、生産手段に対する支配を行使し、生産物の配分にあたつて特恵的な処遇をかち得るであ るにつれて、おそらく爾後だいたい五〇年、ないしはそれ以前に完了すると予期される」、この期において経営者(マネジャ えられ(バーナムによると)、 この移行期間は「ある程度恣意的に日付をくぎると、 第一次大戦に始まり、新しい社会が固ま まで存在してきたある型の社会から、ひとつの新しい、違つた型の社会(経営者社会)への過渡期 『経営者革命』(1941)がある。もちろん、これも直接新中間層を論じているわけでもないし、これに対する鋭い批判もなされ 中間層は支配層の一部であり、古い支配階級から権限を委譲された機能的集団を構成し、昇進の機会をもち、行政・経営・ の特殊な社会的地位は、 **う。次第に他の階級に代つて近代社会の主勢力となり指導的役割を果すようになるだろう、と評価する。** ているけれども、すでに資本主義社会、社会主義社会、そしてナチ・ドイツにしろ、現在を大略一五世紀から二〇世紀初頭 ー)という社会集団ないし階級が社会的支配、権力と特権、支配階級としての地位を求め、やがて達成される、としていた。 「経営者は、個人としての自分たちにゆだねられた所有権を通じて直接的にではなく、生産手段を所有し、支配する国家を —(i)エリート説 国家一つまり、 ンジニアや科学者とは区別される。 国家を構成する諸制度―は、いうなれば、経営者の「財産」になるであろう」。そして、この「経営 これは、新中間層が数的にも社会的にも発展し、やがて政治的にも独立の 階級 に 成長 してゆくだろ かつての資本家や企業家にかわつてその仕事を遂行するということによつて説明されるだろう。新 (移行期)にあるとして 捉 ホワイト・カラー

三八

ける新中間層の形成と動態」というテーマのもとに、われわれは福沢諭吉の「中等社会」論から(多元的) の戦略的エリート論と同じ文脈でエリート説の一つとしてこのバーナムの主張を挙げておくにとどめたい。「近代 日本 におの戦略的エリート論と同じ文脈でエリート説の るとはいえない。ここでは、V・パレートの周流説、T・ヴェブレンの技術者論やF・クローナの権限委譲説、S・ケラー このバーナムの移行期における「経営者」 更に専門的な科学技術と経営の関係、官僚制の問題、所有、経営、権力等の問題が充分論じられて 理論は、まさに新しいエリート・支配階級としての 「経営者」 にのみ焦点があ エリート論への

動きを検討することになるだろう。

問題をとりあげていた。「……真実の教養と教化とを代表する社会の仲間、言葉の最広義に於 ける 中産階級、少なくともそ 断しがちであるということになるだろう。少々遡るが、G・シュモラーは、今日の根本的な社会問題の一つとして中産階級(※) 切であると思われる。 の著しい部分は、経済的に萎縮し、国家及び社会に於けるその勢力を喪失することを問題とすることが今日遥かにもつと大 り政治的には中立的で、しかも道徳的な観察者の観点から捉えていることになる。また、エリート説は社会を「上から」判 ては社会は 安全弁となり、新たな社会的統一の媒介者として位置づけるものである。いわば、中間層は、安定して、秩序と教養のある、 しかも政治的には中立的な立場を堅持し得る中産・中間勢力である。S・ブラウンの表現を借りれば、マルクス主義におい て捉える立場に対して、 的一间安定勢力説(中堅説、 「下から」、つまり政治的批判という観点から観察される、他方この安定勢力説においては「社会は外から」、つま 富める、 ホワイト・カラー層を相対立する資本者階級と労働者階級という二大階級間をつなぐ一種の社会的 緩衝説) 大規模に考え感ずる・教養ある・市民階級は私の理想である」。そして、引用が長くなるが、 先のホワイト・カラー、特に経営者や専門技術者を新しいエリート、支配階級とし

次のような彼の叙述の中にこの立場がよく示されていた。

人達である(『法及び国民経済の根本問題』、一八七五年)。 生活の営みに編み込まれておらず、その国家生活への影響によつては寧ろ単なる営利欲よりはもつと高い動機から 出発するところの の社会的地位を世代から世代にわたり彼等の財産によつてではなく、彼等の子供達の教育によつてのみ 主張し、そんなに直接に営利 きな財産なしに最高の教養が手に入るところの達人であり、適度の・だが少くとも大体その 奉仕に相応する・貨幣収入に依存し、そ 依存する。我々の今日の僧侶、教師、国家及び公共団体の役人、士官、医師、弁護士、文学者、両家、等は大抵は財産なしに又は大 利己主義的階級利害に対するそうした心理的依存性を有たない、一つの広汎な影響力ある社会層が現われた(傍点筆者)と云うことにの依存に負けて仕舞う所有者と相並んで、素よりかかる物質的独立を有たないが、その代りに一つの平均的 に理想的な志向をもつ、 その所有は国家の強力に対して一つの評価できない独立性を与えることが出来るが、その代りに 容易にその特殊な利己主義的利害へ 近代国家及び近代社会の健全さは、古代のそれとは反対に、また部分的には中世のそれともまた 反対に次のことに依存する。即ち

かかげたほとんど大部分の代表的論者たちに影響を与えた」。 たが、「シュモラーの希望はしたがつて、新しい大きな自由(職業的)な中間階級の発生であつたのであり、それは旧中間層 シ 2 モラーはその後においても「ホワイト・カラー層(職員層)とは何か」(一八九七年)「社会問題」(一九一八年) を論じ かれらのもつていた社会安定化の機能を受け継ぐはずのものであつた。こうした見解は、後で中間層のテー ゼ

中産階級の伝統に連なる理念(あるいは「神話」)と現実を確認するための理論的・実証的研究と論争であつた。 ならないだろう。 ける分化と分解過程の中で新しい社会的潮流を担い、形成する安定した中堅の中間層とはなり得なかつた、 までのところでは、一時的にか、部分的にこの立場の期待をにない得たとしても、多くの場合、近代資本主義社会のもとにお が異なるけれども、 新中間層の現実と社会的存在が、この立場からの主張と期待とに重なり合うものであつたかどうかは、 アメリカの場合には、L・ウォーナー等に代表されるアメリカ合衆国の階層研究の 主潮は、 各国多様であり歴史的社会的に制約されるものとして位置づけられなければならない。 論者によつて評価 といわなけれ 少なくともこれ ア まさしく、 メリカ的な

c w ・ミルズの問題提起に総べていまだに解答は与えられていないのである。

われは、具体的には森本厚吉の新生活運動、 社会政策学会の流れ、大正期―昭和期の民本主義、教養主義、文化主義等の社会的基盤を辿ることもできるだろうが、 近代日本の中でこの立場をみるならば、明治の啓蒙期における福沢の学問による「中等社会」論、 中流階級論を検討する予定である。 金井延、 桑田熊蔵らの われ

分解説 からの「再分解説」とでも称すべき立場からの考察であり、⑴の近代的な所有概念にもとづく資本と労働という本質論的な ー労働者」「グレー・カラー」「サラリアート」「知的労働者」とに分解を余儀なくされている社会層として捉え る。 成され増加してきた事実を認めつつ、現代的状況において再び動揺し、「新エリート」「知的エリート」と「ホワイト・ 代社会の展開過程の中で、 ければならない。 でに批判検討してきたように、いずれの主張も各々論拠をもつているが、一面的で断片的な把握にとどまつていると言わな 僚制的傾向、 **臼中間的性格の曖昧さと無力、これに対して積極論が⑴新中間層の労働過程における機能的側面、臼権限委譲、** して(3)エリート説、 以上によつて、 (滅亡説)とは区別される。この主旨から、 また、前節でみたような現代における増加する新中間層の諸特徴を充分考察していない。 新中間層の位置づけをめぐつて多少系譜的に⑻消極論として⑴分解説、 ⑷安定勢力説(緩衝説)について言及してきた。消極論は、⑴資本主義社会における労働 力の 雇用労働化しつつも、新たな企業・労働過程にもとづく機能的範疇・集群・社会層が社会的に形 次節で「新中間層」論の現代的課題を整理してみたい。 (2)大衆社会説、 しかし、 そして的積極論と われわれは、近 われわれがす (iii) 合理的官 積極論 カラ

- î S・ブラウン著(鈴木幸寿・田中義章訳)『新中間層』、誠信書房、昭和四三年、二―四頁。
- 2 K・マルクス『資本論』(長谷部文雄訳)、(青木文庫)、(9第三部、第二分冊、第四篇第一七章、 及び同、 (10)一第三分冊、 第五篇第二三章等参照。
- 3 第三部第四篇第一七章、四二七—四二八頁、(4)同、四二九頁、(5)同、四三〇頁。

第三部第三分冊、

五四九頁。

- S・ブラウン、前掲書、一六一三○頁。
- 8 山川均「中産階級滅亡論」(1/2/3)、『改造』大正一〇年、第三巻一、二、三号。
- 9 戸坂潤『日本イデオロギー論』(一九三五年)、『戸坂潤全集』第二巻所収、勁草書房、一九六六年、三七六頁。
- 戸坂、同書。
- C・W・ミルズ著(杉政孝訳)『ホワイト・カラー』、創元新社、昭和三二年、五一六頁。
- 同、一二頁。
- 同、一二頁。
- 同、三三一頁。
- R・ケーニッヒ著(佐藤智雄・鈴木幸寿訳)『現代の社会学』、誠信書房、昭和三二年、特に「中間層の問題の一般的評価」、一一三頁。
- ケーニッヒ、同書、一四八頁。
- 18 M・ウェーバー(世良晃志郎訳)『支配の社会学・Ⅰ』、創文社、昭和三五年、辻清明『日本官僚制の研究』、東大出版。
- E・ベルンシュタイン(佐瀬昌盛訳)『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』、ダイヤモンド社、昭和四九年
- E・ベルンシュタイン、同書、五三頁。

同、二九一三〇頁。

23 同書、七七頁。 J・バーナム(武山泰雄訳)『経営者革命』、東洋経済新報社、昭和四○年、七六頁。

24

同、八四一八五頁。

- 昭和三七年。Fritz Croner,Soziologie der Angestellten, Kiepenheuer & Witsch, Köln·Berlin, 1962, S. Keller, Beyond The Rulling Class, Randon House, N. Y., 1963 V. Pareto, The Rise and Fall of the Elites, The Bedminster Press, 1968, T・ヴェブレン(小原敬士訳)『技術者と価格体制』、未来社、
- (26) S・ブラウン、前掲書、三〇頁、四五頁。
- (幻) G・シュモラー(戸田武雄訳)『法及び国民経済の根本問題』(一八七五年)、有斐閣、昭和一四年、一四〇頁。
- (28) G・シュモラー、同書、一四八―一四九頁。
- (2) S・ブラウン、前掲書、八―一一頁。
- 本標準』」(中央公論、大正一〇年、二月号)、同「中流階級の社会運動』(中央公論、大正一〇年、第三号)、 森本厚吉「生活不安の実相」(中央公論、大正九年、新年号)、同「我国文化の基本的欠陥」(中央公論、大正九年、第四号)、同 同「知識階級同盟論」(中央公論、大正一〇 「現代経済生活の『日

「新中間層」論序説 (一一九七)

四 新中間層の形成と動態、そして変革期における新中間層

た、もしくは一九二〇年代、そして一九五〇年代のように一時的に関心が高められたとしてもその後にそれらが研究領域と きを適切に捉えるよりも、多分に冷淡・あるいは幻想的・過大な期待という関心のもとで正当な研究領域とされてこなかつ して持続的に追求されることはなかつた、といえる。ここでは、これまでの本論での検討を受けて、まず「再分解説」とも 新中間層の増加をめぐつての議論、評価が各々の論拠をもち得ても、いずれもが一面的で断片的であり、彼らの現実の動

されてきた。産業化は大まかに次の三段階に区別され、各々の段階特有の技術的特性を展開してきた。産業化の第一段階― 大量生産体制の確立、大量の半熟練労働者、量的にマニュアル労働優位の段階だがそのもとでノンマニュアル労働増加 の間の技術格差等(日本では一九五〇年前半までが、この段階)--、 力機械使用への展開、 階と権限委譲及び社会移動が問題となろう。これまでのところ産業社会においては、資本主義社会、社会主義社会において 的性格と役割は、 いうべき立場からの新中間層研究の諸問題を考察し要約しておきたい。 (1)—(i)新中間層のおかれてきた歴史的社会的諸条件の検討、 ⑴新中間層の形成と動態―分化と分解―をめぐる諸問題 労働細分化・分業化の進展、労働疎外の問題、こう した もとで労務管理、技術指導、事務管理、 特に生産・労働過程においてますますより高い科学・技術水準、 その歴史的社会的諸条件の変化の中でこそ再考察されなければならないだろう。なかでも、 依然農業優位の段階だがそのもとでマニュアル労働増加・第二次産業労働化の段階、 特に生産過程、労働過程の問題。新中間層の増加、その社会 第二段階―工作機械および運搬装置の自動化による本格的 知識水準が要求され、分業化、 専門化、 販売、 熟練と非熟練と 教育、 組織化が促進 産業化の諸段 福利厚 の段

(worth-Ethic) 生等の仕事を膨大なものにし、 然・人間 (2)大衆社会説と(3) 資本の分解、 開されて、 抑制するのがよいのかというテノロジー・アセスメント(技術の事前評価・再点検) そして、今や、 現場におけるノンマニュ といえる。 産業社会の変化を説明したが、 て影響される。 の そしてビジネス・ ⑴分解説と⑷安定勢力説(緩衝説)は、むしろ産業化の第一段階 においてこそ 論拠をもち得、 商品化、 強制や、 われわれが産業化・技術変化のどの段階でそれらを問題にするかによつて異なつてくるだろう。 ・社会の諸関係が根本的に問われ出している現代社会的状況における増加する新中間層の諸傾向 商業労働者、 従つてわれ 労働の分解、 積極論では労働の機能的分化、 が追求されつつ たんなる勤労論理によつてではなく、 周知のように、 たんにものをつくる技術万能の時代は去り、 エリ 表——

第参照) 才 われが先に第二節でみたように、 ート説は、 監督労働者、 ア 1 ル化、 ŀ 「新中間階級」 メーションは電子計算機を用いての事務の自動化等による特徴、 ここでは、 ある。 R・ダーレンドルフが前期資本主義社会に対して後期資本主義社会の多元的構造化の特徴を それらの仕事を分化させ、 むしろ産業化の第二段階においてこそその論拠を得、 情報科学技術の発達、 ļ 従つて、 あるいは職員層、 の増大、 第三段階―プロセス これらの特徴に加えて一つの重要な変数として先の 技術水準 を強調する傾向があつたが、それらのあり方は産業化・ 所有関係、 社会的移動、 人間自らの、 産業化の第三段階に位置づけられ、 専門職業化、 ホワイト・カラー層、 生産関係の変化、 管理補助者である事務要員等 を増加 せしめた(日本ではほぼ一九 多くの技術の可能性の中で、 • 理論上および実際上の平等化、 オートメーションは自動制禦装置を組み入れた中央集中管 意味のある、 知識労働化等の段階 労働の商品化、 新中間層の形成と増大が促されてきたとして しかも誠実な選択による労働、 の時代に入つているのである。 あるいはイデ (日本では一九七〇年代以降) どの可能性をのばし、 かつ脱工業化が 分業化、 計器の操作・監視・保守、 階級闘争の イデオロギーとなり得、 才 労働 技術変化 先の消極論では特に労 p の変化 は ギ の機能 制度化、 問題とされ、 1 従来のこれら となり得た、 の水準によつ を重視 的 に求 ある 更に労働 分化が展 価 値倫 した 生産 めて ļ 自 理 は

の諸説によつては適切に捉えきれない。

になろう。 能的分化に焦点をあてて職員、ホワイト・カラー層を積極的に位置づけようとする場合も、委譲過程における企業者と職員 働の商品化に基本的設定するあまりに、こうした権限委譲の展開を軽視することになつたし、積極論のように労働過程の機 段階は、 職員の昇進はいまや自動的過程ではない―の五段階を参考にすることができる。もちろん、この企業者機能の権限委譲の諸 による職員の一層の増大、 営組織の大規模化と複雑化、 第四段階―職員への企業者機能の分割、委譲が決定的となり、職員の地位の専門化された「職業」への発展、 ある部分の「外部の」非血縁者への分割と委譲、 者機能がいまだ分割も委譲も行われていない段階―、第二段階―企業者機能の血族者への分割―、 権限委譲 地位の間の連続性が相対して強い第三段階、 技術水準の変化、産業化の諸段階と共に、 「新中間層」を歴史的社会的に条件づけるものとして考慮していかなければならない。 経営組織規模、 第五段階においては新たな分化と分解が展開しつつあるのである。産業化の第三段階、 (der Delegationsproß) 産業及び職業の諸領域等によつても個別に異ならざるを得ないだろう。 組合組織化、 技術的発展 によつて 委譲過程が一層進展、多くの、あらゆる種類の「雇われた専門家」、移動 の五段階、 新しい賃金原理の導入、機能の細分化、そして巨大化し複雑化した経営組織の中の すなわち、 権限委譲及び社会移動の展開についても注目したい。 第四段階と区別される、 職員は企業者に密接し企業者の共働者であり「家族労働」の一部であるー、 第一段階 (出発段階) 第五段階においてはその論拠が限定されてくること **--通信、** 会計、 記帳、 先の消極論においては、 権限委譲の第五段階は、 第三段階―企業者機能の 労働管理等の業務、企業 **F**・クロ 1 第五段階-経 ナーの いう 労

て権限委譲の第三段階から第四段階への動きの中で問われることになろう。 われわれの ただし、こうした段階論的な設定をした場合に、気をつけなければならないのは、 「近代日本における新中間層の形成と動態」(一九〇〇年—一九三〇年)という課題は、 例えば、 しばしばアメリカ合衆国が最 産業化の第一段階、 そし

に理解することは間違いである。ということであろう。まさに、それぞれの国の歴史的・文化的・社会的諸条件と類型論的(4) 初の中流 (中産)階級社会といわれることがあるとしても、そのことが、他の国々の将来 のイメージとして 単純に段階論的

な把握が重視されなければならない。

管理職、 区別をなすことによつて、新中間層、 低い特殊的資格としての専門職一、 販売職との間の分解(エリート層とホワイト・カラー労働者層)、そして個別の各カテゴリー内部にも分解をもたらしつつあると と専門・技術職) 事務職と販売職、 違いである。第二節で明らかなようにホワイト・カラー層の増加傾向を内部的にみると、その初期乃至前半期では相対して するのか、またはそのうちのどのカテゴリー、すなわち、管理職、 みなければならないだろう。この意味においても、従来の諸説によつては、現代の労働者生活の変化を捉えることはできな いて論じようとしているのか、ということである。 ⑴―⑴新中間層の副次的諸範疇の問題。これは、われわれが新中間層を論ずる場合に、新中間層全体として議論しようと ①管理職―高度の権限をもつ高級管理職と中間管理職―、②専門・技術職―高度の資格を要求される専門職と比較的に 専門・技術職、事務職、 ④販売職ースペシャリストとしての販売職と一般販売員―等の区別、そして公務員と民間員、経営組織の規模の において進んだこと、を知り得た。従つて、われわれは、全体としての増加傾向が副次的な機能分化によつて 最近では専門・技術職の増加率の高いこと、 販売職という内部分化を際立たせただけでなしに、一般に管理職、 ③事務職―管理的および専門技術的側面をもつ事務職と「ルーテン・ワーク」としての ホワイト・カラー労働の動向を把握していくことが必要になつてきている。 、ホワイト・カラー労働を一つの非分化的なカテゴリーとして扱うことは間 女性の就労化が特に事務職と 販売職(アメリカでは特に事務職 専門・技術職、事務職、 あるいは販売職の、いずれにつ 専門・技術職と事務職

しており、 (1) 回資源配分に関する問題。 自然資源・物理的資源というよりも社会的資源 (social resources) である。具体的には、 われわれがいう資源とは、 人々の行動目標を実現しうる可能性、 利用可能な諸手段を意味 ここでは、 ①職業と従

四五 (1101)

四六

運輸、 どのように配分されているのかを現実に検討することである。 業上の地位 法的社会的サービス)、 生産労働者層といつた他の社会層についてと同様に、 (労働―生物的肉体的資源)、②所得と資産 ④ 教育と社会移動の機会、⑤ 意思決定への参加、 (所有―物財的資源)、③ 基本的サービス 新中間層・ホワイト・カラー層についてもこれらの諸資源が ⑥自尊、 を指している。すなわち、支配層、 (医療、 近隣、 環境の快適さ、交通

のパ 世代間移動による場合が多いこと、 対して閉鎖的であれば、 せて雇用労働化にもかかわらず新中間層全体の地位の有利さ、安定が指摘されてきたといえる。G・ギデン して市場能力は低下し、 の資格と熟練度が高く、 市場能力 か。これまでは、 そこで、これに関連していくつかの問題が考慮されるだろう。 ターンがあり生涯所得額も多いこと、特別給付(fringe benefits)や資産の有利さ、 アル・職員層とを対比して、後者の方が、所得は相対して高く安定性をもつていること、全生涯所得についても独特 (market capacities) と社会移動(social mobility)との二つの変数の関係から説明を試みている。 主に①職業と従業上の地位、 移動が開放的になつても実際には小さな移動の方が多いのであり、従つて、 需用にかなつていれば、市場能力が高く報酬も多い。また、市場能力が高く、 報酬も少なく不安定となり易いだろう。 その報酬も多く地位も安定しているだろう、しかし移動が開放的となれば、 等によつてノンマニュアル・職員層の有利性と安定性がとりあげられてきた。 ②所得と資産、 ④教育と社会移動の機会を中心として、 まず、 いままでのところでは、 (1)特定の社会層のどの資源配分を問題に 仕事の安定性、 マニュアル・生産労働者層とノン 地位を大きく変える可能性は 逆に競争が激しく相対 学歴も高く昇進の可 しかも社会移動が相 他の社会層と相対さ 教育上、 スがこのことを しているの 技術上

の不整合化・不一致化 (status inconsistency)、そして市民的自我・市民生活・地域住民社会から切り離され分断された閉塞 アル・生産労働者層と比較した時にどれ程の違いがあるだろうか。 今日の日本において、 ③基本的サービス、⑤意思決定への参加、 われわれは、ここに現代における社会的収奪過程、 ⑥自尊の資源配分を問題にした場合には、 7 地位 =

的な職場・企業生活の諸状況を指摘しておかなければならない。

1 間管理職」 労働下層 有利さ、 中からかち得てきた生産労働者の労働生活諸条件の改善安定化、 の有利性と安定性を指摘したが、 luent worker)° 的新中間層の分解化とブルー・カラーの一部上層の 消費生活の変化、 ④のいずれの配分をめぐつてもこれらの地位の有利性が低下し安定性が揺らぎ出している。 の地位と生活とに重複し、 の不安といつた現象も、 先に資源配分の①職業と従事上の地位、 教育水準の上昇等によつて、生産労働者上層の地位と生活が相対的に向上し、 新中間層の増加傾向、 新中間層の分解化を如実に示す一端といえるだろう。 時にはむしろ上まわる 程 「中間層化」(「中産階級化」embourgeoisement) 中でも事務職と販売職の増大によつて、結果として分解作用が進み、 ②所得と資産、④教育と社会移動の機会をめぐつて、 の傾向を示してきているという指摘さえなされつつある。 産業化の第二段階から第三段階への転換に至る市場能力の 逆に、 (「豊かな労働者」 ホワイト 長い労働運 新中間層全体 カ ラ 強動の 中

標準を著しく上昇変化させることによつて再び両者の格差をおし拡げ資源配分に関する新たな関心を呼び起し「相対的剝 属意識の著しい増加を促してきたが、 ける産業化と社会変革は、 変化を見落してはならないし、 ある第三段階における分解化である(「再分解化」)。この意味で、社会生活における価値意識の変化、 ものであり、 しか (relative deprivation) 主観的 (の)この新中間層の分解化は、 な標準(望ましさ・欲望) 第二段階での新中間層の相対的な有利さと安定さとを経た後の、 を強めつつある。新中間層の新たな分解化過程の中で、 確かにこれまでこれら二つの標準の差を縮小させて「中間層の把大化」と中間層意識 その変化に基づく資源配分を対比する際の一般的客観的な必 要標準 とは動態的なものであり、 同時にこれらの標準自体をも上昇変化させたのであり、 産業化の第一段階における主に経済的収奪に関心が向けられていた状況とは異なる 少なくとも産業化の諸段階において異なつてきた。近代に 一般的福祉の増進に一層関心が向けられつつ 新中間層にこうした不安状況と剝奪感を 今日では特に相対的、 価値標準· (基準乃至規範) 生活標準の 中 間 と相対 主観 層所 的 お

(6)

状況把握・規定し、そして対応するか、という問題は人々の間で決して同じではないし、極めて難しい課題である。 なる歴史諸状況において検討することである。 の性質に与える影響の可能性を検討することである。近代資本主義社会の生成過程においてではなく、それとは明らかに異 ーバーを引用するまでもなく、 を促すものであるが、それらの内容、拡がり、方向と強さは多様であり、歴史における選択は重層的である。これは、 る自己決断的行動の準備段階にもつねに状況の規定があり、状況の規定は、諸条件の多少とも明確な概念化と態度の意識化 ⑴―엢新中間層の生活過程と社会的対応に関する問題。こうした歴史状況にある新中間層・人々が、これらをどのように 歴史状況においてもたらされた社会的経済的変動が、一群の人々、社会層(新中間層) いかな ウェ

異なるだろう。近代日本の一九二○年、三○年代における諸社会層の対応と一九七○年代という現代のそれらの対応は帰す あるときめつけて済むものではないし、また、国別に、更にさまざまの社会層、 関心をもたず、「彼らが気づかつているのは、これらの客観的出来事の数限りなく多様な日常生活の小問題への主観的反映、 や経済的・社会的特質をもつた外的諸条件を概念的に把握している」にすぎない。大衆の階級意識は、そんなことには何の わけで、階級意識を問題にしても大衆の階級意識は革命的指導部が信じこんでいるようにおあつらえむきにできあがつてい 人々の潜在的、そして顕在的な利害関心、日常的生活は、多様に構造化しつつ、重層的に歴史的な展開を繰り拡げている 影響である。 娯楽、ダンスといつた広い意味での性的遊びや満足への関心であり、さらには育児の諸難問、 その他、その他への関心である」。大衆のこの階級意識は、単に日常生活 から切り離されて、一方的に 虚偽意識で 指導部の階級意識は、しばしば「……社会をつくる人間が支配されている客観的、歴史的、 だから、この意識の内容は、食事、衣裳、家族関係、狭い意味での性的満足の可能性、 職業層、世代層、性別層、 家具類、余暇の長さと 映画、芝居、見 社会経済的過程 地域によつても

対応をしつつあるのか。新中間層がどのような対応をしたのか、 る新中間層の形成と動態」の中心的な課題に他ならない。 るところ同じことなのか。なかでも新中間層は、どのような対応をしてきたのか、また新たな歴史状況のもとでどのような という課題こそ本論(序説)以降に続く「近代日本におけ

②一九三〇年代問題との関連

協調と産業合理化が推し進められるが、人々の流動化や都市化が進み、民衆意識の高揚と強い生活意欲にもかかわらず民衆 の生活難は和らげられることはなく、やがて「国民生活」の耐乏化が強いられていく。 逆に反動として思想的な閉塞化と固定化へ転落しつつあつた。また一九二〇年前後以降より恐慌、不况が打ち続く中で労使 「近代」への疑問、それへの余りの傾斜への反省(近代主義への批判、 一九二〇年代、一九三〇年代に、かつての和魂洋才、 殖産興業、 富国強兵等の勢いとは異なり、早くも一九世紀的西欧 マルクス主義の多様化)がすでに用意され、 そのことが

精神主義、復古主義の強調による強い国家主義的なイデオロギーの抬頭(「①資本主義、 化主義、社会主義、共産主義、 二〇年代、三〇年代の大正期・昭和初期に「新中間階級論」「知識階級論」「俸給生活者論」等が、民本主義、 をもたらすことになつた。 対して生活基盤を弱められ、危機感、喪失感、没落感を深めつつあつたといえる。この新中間層をめぐる状況について一九 しかし、一九三〇年代の状況の推移は、歴史における選択の可能性と重層性とが次第に閉塞され固定化されて、結果的には こうした精神状況・生産労働過程・社会過程・生活過程の展開にみる歴史状況において、知識人・職員層・新中間層は相 観念主義、 理想主義、②家族主義的傾向、③農本主義的思想、 丸山真男は論文「日本ファシズムの思想と行動」の中で、「日本におけるファ 無政府主義、国家主義等の諸 (社会) 運動とさまざまに結びついて展開されたのであつた。 ④大亜細亜主義に基づくアジア諸民族の解放」)と 国家体制化 社会主義が共有している物質主義批判 シズ 教養主義、文 運動

四九(一)

国日本において自発的協力を保証する役割を果したのは、この第一の意味での中間層である」と鋭く捉えていたといえるだ 第一の社会層・類型をとりあげて、「ファシズムの社会的地盤になつているのはこの 層 である」、「実践的行動的であり、軍(足) る文化人乃至ジャーナリスト、自由知識職業者(教授、弁護士)、及び学生層、という二類型を設定していた。そして、 工場の親方、土建請負業者、小売店主、大工棟梁、小地主、自作農上層、学校教員、特に小学校・青年学校の教員、 つぱにいえば、 その他一般の下級官吏、僧侶、神官というような社会層、他の一つは都市におけるサラリーマン層、 中間層が社会的な担い手になつているということがいえます」と述べて、その中間層を、一つは小工場主、町(11) 村役場 Į, 特に わゆ

ろう。

成と動態」が充分とりあげられているとはいえない。従来はナチズムやファシズムとの共通性や対比のあまり、 問をもつている。第一に中間層についての第一類型と第二類型の区分が余りに大ざつばであり、「近代日本 の 新中間層の形 またそのことが逆に国家主義的イデオロギーや国家体制化を担い推進することが出来得たか、歴史における他の選択の可能 ける新中間層上層の生産技術・経営官僚職員・行政官僚職員としての専門技術者や官僚層の動きの研究が更に深められるべ にとどまることになつたのか、もつと掘り下げてみるべき課題と考える。第三に、逆に産業合理化運動や国家動員体制 こで意図しているのは、 きであろう。これら第一、第二、第三の課題は、いずれも大きな研究課題であり今後に残されている。われわれが、 の対応における結合、 消極的抵抗」「分散性、孤立性」は事実そうした傾向を色濃くもつていたとしても、 だが、 この丸山の中間層についての歴史的な位置づけについては、 屈折、 丸山のいう第二類型を含めた新中間層が何故消極的抵抗、 離反、漂流、自縛が考察されてこなかつたのではないだろうか。更に丸山がいう第二の類型の われわれは基本的に同意するとしても、 分散と孤立にとどまることになつたか、 何故に 消極的抵抗、 分散性、 いくつか 中間層諸層 いまこ 孤立性 での疑

性がなかつたのか、という第二課題と第三課題に取り組むことである。

従来、国家主義的イデオロギーの抬頭と国家体制化、軍国主義化について、労働運動や反体制運動が軍事的警察的天皇制

性格 の弾圧による逼息、社会民主主義による裏切りと分裂政策等による説明が繰り返されてきたが、やはり、 (成長力、合理化)、労働者階級の多様で重層的な構造的特質、産業化、近代化過程での価値観の変容、 日本の資本主義の 運動指導のあり

方、などの問題をも再考察していく必要がある。(一九七六年八月稿)

- (1) わが国の一九五○年代から六○年代前後にかけての大衆社会論、ホワイト・カラー論、中産階級論等の詳細については、 げてみたい 別の機会にあらためてとりあ
- (2) 富永健一『産業社会の動態』、ダイヤモンド社、一九七三年、九七-一〇一頁、飯田賢一『近代日本の技術と思想』、東洋経済、一九七四年、一〇六-| | || 直, Laile E. Bartlett, New Work /New Life, Harper & Row, Publishers, 1976, pp. 9-25
- 3 Fritz Croner, Soziologie der Angestellten, Kiepenheuer & Witsch, Koln · Berlin, 1962, S. 135-139
- 4 Anthony Giddens, The Class Structure of the Advanced Societies, Hutchinson Univ. Library, London, 1973, p. 179
- (15) Ibid., pp. 179–188.
- 6 層―一九五五年~一九七〇年―」等を参照のこと。 拙著『社会的成層の研究』、世界書院、一九七五年、第四章「現代社会と不平等構造」、および第七章「現代日本の階級構造の変化とホワイト・カラー
- 7 1918, p. 68. William I. Thomas and Florian Znaniecki, The Polish Peasant in Europe and America, Vol. I, The Gorham Press, Boston,
- ヴィルヘルム・ライヒ著(久野収訳)『階級意識とは何か』(一九三四年)、三一書房、一九七四年、三二一三三頁。
- (9) 最近の研究としては、浜口晴彦「新中間階級問題の発生と展開」、早稲田大学社会科学研究所編『日本のファシズムー形成期の研究ー』所収、 大学出版部、一九七〇年)。 (早稲田
- (10) 丸山真男『現代政治の思想と行動(増補版)』、未来社、一九六四年、四〇一五七頁。
- (11) 丸山、同書、六三頁。
- (12) 同書、六四頁。
- (3) 同書、六五一六六頁。
- 白井泰四郎「一九三○年代の労働者階級」、荒川幾男「一九三○年代と知識人の問題」、いずれも『思想』一九七六年六月号。